



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 30

次世代に伝えたい共同薬物治療管理の意義

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

薬学生への講義で私が伝えている 次世代の新しい薬剤師像とは

ありがたいことですが、この数年、薬学生に話をする機会が増えています。

正式な講義としては、2つの大学で4年生を対象に「コミュニティファーマシー論」や「新薬局論」を担当させていただいていますし、その他、いくつかの大学で単発の講義を担当させていただいています。時期的には、なぜか4年生あたりが一番多いですが、1年生の early exposure（早期体験）や、実習を始めた5年生、そして就職を控えた6年生を対象とした単発の講義もよくあります。

さらに最近では、薬学生が独自に企画したセミナー（多くは就職活動の一環として）でお話しするケースも出てきました。

このような機会では、現在の抱える医療の問題は、多職種連携と情報共有、とくに医師と薬剤師が共同して薬物治療管理にあたることで解決していけるのではないか、ということをお話ししています。

「薬局 3.0」という概念も紹介し、今の「調剤薬局」と呼ばれる薬局の在り方から、超高齢社会に求められる新しい薬局の在り方へと変わっていくだろうと語ります。その中で、薬剤師は自らが調剤した医薬品がきちんと効果を発揮しているのか、また、副作用を引き起こしていないかを自分でチェックすることは非常に重要であり、そのためのツールとして、バイタルサインの知識や技能を習得しておくことは大切だということをお伝えします。

さらに、薬学生が一生懸命学んでいる薬理や薬物動態、製剤学といった知識は、そのほとんどが薬を服用

してからの状態を考え、推測するもとなる知識であり、それこそが、バイタルサインのデータをきちんと評価（＝フィジカルアセスメント）するために必要不可欠な知識であるということをお話しています。

講義後のアンケート等に現われた 興味深い薬学生の反応——その不安と安堵

このような講義のあと、アンケートを採ることもありますし、学校からレポートが課題として課せられることも多いのですが、これらを見ていると、ある一定の傾向が見られます。

中でも、多くの薬学生が寄せてくれる感想が「自分が難しい勉強をしている内容が、将来、役に立つと思ってほっとした」という内容です。とくに4年生以後の学生にとっては、試験で大変苦労した内容が、薬局や病院実習ではあまり用いることがないのではないかと漠然とした不安があるように感じます。とくに、先輩や、場合によっては実習先の薬剤師から「そういう知識は、実際の業務ではほとんど必要ないよ」と聞かされていることもあるようです。

今、改訂が進んでいる薬学教育のモデルコアカリキュラムでも、バイタルサインやフィジカルアセスメントへの理解を深める方向に検討が進んでいるようです。なかなか現場でバイタルサインやフィジカルアセスメントを実践できるケースは多くないと思いますが、是非、本連載をお読みいただいている薬剤師の先生におかれましては、薬学生たちに、「医師と薬剤師が共同して薬物治療管理にあたる」ことの意義と文脈、そしてその中のツールとしてのバイタルサインの在り方について、熱く語っていただければと思います。